

ダニエルの書 - 第一百七十四号

預言的洞察と神の啓示：ダニエルの幻とその終末的意味合いを理解する

Jeff Pippenger

2024-04-04

十三節から十五節に示されている第三の代理戦争を扱うにあたり、まず、これらの節に至るまでに何が先行していたかを思い起こそう。第十章において、ダニエルはその最後の幻を受け、それによって彼は内的小よび外的な預言的幻の双方を理解する者として示される。ヘブライ語の「dabar」は「ことば」を意味するが、「thing」と訳されている。第九章では、ガブリエルが二千三百日に関する幻をダニエルに理解させるために来たとき、ヘブライ語の「dabar」は「matter」と訳されていた。

さて、私が祈りのうちに語っている間に、初めのときの幻で私が見たその人ガブリエルが、急ぎ飛んできて、夕のささげ物の時刻に私に触れた。彼は私に知らせ、私に語って言った。「ダニエルよ、私は今、あなたに知恵と悟りを与えるために出て来た。あなたの願い求めの初めに命令が出され、私はそれをあなたに示すために来た。あなたは非常に愛されているからである。だから、この事を悟り、この幻を心に留めよ。」ダニエル書 9:21-23.

ガブリエルがダニエルに「そのことを悟り、幻をさとれ」と告げたとき、ヘブライ語の“biyn”は「悟る」とも、また「さとる」とも訳されていた。この語は、精神的に分けることを意味する。ガブリエルはダニエルに、「こと」と訳された“dabar”と、「幻」と訳された“mareh”との間に、精神的な区別を設けるよう告げたのである。二千三百年の預言に関してガブリエルがダニエルに与えていた解釈を理解するために、ダニエルは、「こと」として示される預言の幻と、預言的“mareh”の幻との区別を認識しなければならなかった。「こと」、すなわち語を意味する“dabar”は、預言の外的な線を表し、“mareh”の幻は預言の内的な線を表している。

ダニエル書10章で、預言を学ぶ者に最初に明らかにされる真理は、ダニエルが、預言の内的な系統と外的な系統の双方を理解している終わりの時代の神の民を代表しているということである。

ペルシアの王クロスの第三年に、ダニエル、すなわち名をベルテシャザルと呼ばれた者に、一つの事が示された。その事は真実であったが、その定められた期間は長かった。彼はその事を理解し、幻を悟った。ダニエル書 10:1.

「事」とはヘブライ語の「dabar」であり、「幻」とは「mareh」の幻である。預言者として、ダニエルは神の終わりの日の民を代表しており、その完全な成就是十四万四千人である。クロスの第三年は、ダニエルを、一九八九年の終わりの時に始まった改革の線の中に位置づける。「そのころ」、すなわち一九八九年から、やがてアメリカ合衆国に到来する日曜法に至る歴史を表す期間において、ダニエルは三週間、嘆き悲しんでいた。十四万四千人の改革の線において、この嘆きの期間は、黙示録第十一章の二人の証人が通りに横たわって死んでいる三日半を示している。われわれの主もそこで十字架につけられた、

ソドムおよびエジプトというその大いなる都の通りは、またエゼキエルの死んだ枯れた骨の谷でもある。

第10章で、ダニエルはキリストの御姿へと変えられ、彼が見た幻をガブリエルが解き明かす前に三度触れられる。その幻は礼拝者を二つの階級に分けた。永遠の福音は常に礼拝者を二つの階級に分ける。ダニエルは、幻を恐れて逃げ去った階級とは対照的に、十四万四千人として表される礼拝者の階級を代表していた。

第十章に先立って、ガブリエルは幻を解き明かすために三度ダニエルのもとに来た。彼は第七章と第八章の幻を解き明かしたが、それらは聖書の預言における諸王国を、政治的側面（第七章）と宗教的側面（第八章）の両面から描いていた。次に第九章では、ガブリエルは二千三百年の預言を解き明かした。第十章でガブリエルが現れるのは、第九章で未完のまま残された解き明かしを完成させ、さらに二種類の礼拝者を生み出した幻の解釈をダニエルに与えるためである。まずガブリエルは、第十四節でその幻の概観をダニエルに示す。

今、私は、後の日にあなたの民に何が起こるかをあなたに悟らせるために来た。というのも、この幻はなお多くの日の後のことに関わるからである。ダニエル書 10:14

二種類の礼拝者を生み出したキリストの幻は、終わりの日に神の民に起こることを表している。第7章と第8章の解釈は、聖書の預言において諸王国の興亡として示された歴史の解釈であり、その興亡はそれぞれ猛獣と聖所の動物で描かれている。第9章の解釈は、二千三百年の預言の中に示されているさまざまな預言的期間の詳細な内訳であった。第10章の栄光のキリストの幻は、何らかの形で、終わりの日に神の民に起こることを表していた。ガブリエルは、栄光のキリストの幻の解釈、すなわち歴史の詳細な概説を語り始める前に、その解釈が何を表すのかをすでにダニエルに告げていたことを彼に思い起こさせる。

彼は言った。「あなたは、なぜ私があるところに来たのかを知っているか。今、私はペルシアの君と戦うために戻る。私が出て行くと、見よ、ギリシャの君が来る。」ダニエル書 10:20

ガブリエルはダニエルに、14節で自分が終わりの日に神の民に何が起こるかをダニエルに悟らせるために来たのだと語ったことを思い出させ、この後に続く預言的歴史の提示をその文脈に位置づけるよう期待した。ダニエルは、嘆き始めたその最初の日から、明確な理解を求め続けていた。

彼は私に言った。「ダニエルよ、恐れるな。あなたが悟ろうと心を定め、あなたの神の御前でへりくだったその初めの日から、あなたの言葉は聞かれ、私はその言葉のゆえに来たのだ。しかし、ペルシアの王国の君が二十一日間、私に立ちはだかった。だが見よ、高位の君の一人であるミカエルが助けに来てくれたので、私はそこでペルシアの王たちのもとにとどまっていた。」ダニエル書 10:12、13

ダニエルが三週間喪に服した後、彼はキリストの幻を見たが、それはパトモス島にいたヨハネが見たキリストの幻と預言的に一致していた。

まさに神の御子ご自身がダニエルに現れた。この描写は、キリストがパトモス島で彼に現れたときにヨハネが記したものと似ている。ここで私たちの主は、もう一人の天の使いとともに来て、終わりの時代に何が起こるかをダニエルに教える。この知識はダニエルに与えられ、世の終わりが臨んでいる私たちのために、靈感によって記録された。

世の贖い主によって啓示された偉大な真理は、隠された宝を探すように真理を求める者たちのためのものである。ダニエルは年老いた人であった。彼は生涯を華やかな異教の宮廷のただ中で過ごし、その心は大帝国の政務に煩わされていた。それでも彼はこれらすべてから身を引き、神の御前で自分の魂を苦しめ、いと高き方の御旨を知ることを求めた。そして彼の切なる嘆願にこたえて、終わりの日々に生きる者たちのために、天の宮廷からの光が与えられた。そうであるなら、天からもたらされた真理を理解するために、神が私たちの悟りを開いてくださるよう、私たちはいかに熱心に神を求めるべきであろうか。

「私、ダニエルただ一人が、その幻を見た。私とともにいた人々はその幻を見なかったが、彼らには大きな震えが襲いかかり、彼らは逃げて身を隠した。……私には力が全く残らなかった。私のうちにあった麗しきは腐敗に変わり、私は力を保つことができなかった。」真に聖化された者は皆、ちょうどこのような経験をするであろう。キリストの偉大さ、栄光、完全さが明確に見えるほど、彼ら自身の弱さと不完全さをいっそう鮮やかに見るようになる。彼らは自分が罪のない者だと主張しようとする気持ちを少しも抱かない。自分では正しく、美しいと思っていたものも、キリストの清さと栄光に照らされると、取るに足らず、朽ちるべきものにしか見えない。人が神から離れ、キリストについての見方がきわめてあいまいなときにこそ、「私は罪がない。私は聖化されている。」と言うのである。

ガブリエルが預言者の前に現れて、こう告げた。「大いに愛されている人ダニエルよ、今わたしがあなたに語る言葉を悟り、立ち上がりなさい。今、あなたのもとに遣わされたのだ。」彼がこの言葉を私に語ったとき、私は震えながら立ち上がった。すると彼は私に言った。「恐れるな、ダニエル。あなたが悟ろうと心を定め、あなたの神の前で身を低くしたその初めの日から、あなたの言葉は聞かれ、わたしはその言葉のゆえに来たのだ。」

天の大君は、なんと大いなる栄誉をダニエルにお与えになったことでしょうか。大君は震えるしもべを慰め、その祈りが天で聞かれたこと、そしてその熱烈な嘆願にこたえて、御使いガブリエルがペルシャの王の心を動かすために遣わされたことを彼に確言された。ダニエルが三週間、断食して祈っている間、その君主は神の御霊の感化に抗していたが、天の君である大天使ミカエルが遣わされ、強情な王の心を翻して、ダニエルの祈りに応えるべく何らかの決定的な行動を取らせるためであった。

「彼がこのような言葉を私に語ったとき、私は地に顔を伏せ、口がきけなくなった。すると、人の子らのような姿をした者が一人、私の唇に触れ、……そして言った、『大いに愛されている人よ、恐れるな。あなたに平安があるように。強くあれ、まことに強くあれ。』そして彼が私に語ると、私は力づけられ、こう言った、『わが主よ、お話しください。あなたが私を力づけてくださったからです。』」ダニエルに現された神の栄光はあまりにも偉大で、彼はその光景に耐えることができなかった。そこで天の

使いはその御臨在の輝きを覆い、預言者の前に『人の子らのような姿をした者』として現れた。彼は神の御力によって、この誠実で信仰深い人を強め、神から彼に送られた言葉を聞くことができるようにした。

ダニエルは、いと高き方に仕える献身的なしもべであった。彼の長い生涯は、主のための高貴な奉仕の働きで満たされていた。彼の品性の純潔と揺るぎない忠実さは、心の謙遜と神の御前での痛悔においてのみ比肩しうる。重ねて言う。ダニエルの生涯は、真の聖化の靈感を受けた実例である。Review and Herald、1881年2月8日。

ダニエル書第十章に記されたダニエルの体験は、終わりの時代における神の民を表している。彼らはダニエルとヨハネのように、イエス・キリストの黙示を理解している。ダニエルのその体験が預言史のどこに位置づけられるかを見定める鍵は、彼が嘆き悲しんでいたこと、そして二十一日が終わったときにミカエルが遣わされたという事実に基づいている。第一節でダニエルは、預言における内的な幻と外的な幻の双方を理解していたと記している。その二十一日に先立っては、ダニエルの二つの幻に対する理解は不完全であったが、ガブリエルの解き明かしによって、「事」と「幻」を別個の啓示として完全に把握するに至った。

七十年の捕囚が終わりに近づくとつれて、ダニエルはエレミヤの預言に心を大いに動かされた。彼は、神がその選民にもう一度の機会をお与えになる時が近いことを悟り、断食と謙卑と祈りをもって、イスラエルのために天の神に切に願い求めて言った。「ああ主よ、大いなる、恐るべき神。あなたを愛し、その戒めを守る者に、契約を守り、慈しみを施される方。私たちは罪を犯し、不義を行い、悪を行い、背きました。すなわち、あなたの戒めと定めから離れました。また、あなたのしもべである預言者たちの言うことに耳を傾けませんでした。彼らはあなたの名によって、私たちの王や君侯、先祖、またこの地のすべての民に語ったのに。」

これらの言葉に注目しなさい。ダニエルは主の御前で自分の忠実を宣言しません。自分は清く聖なる者だと主張するのではなく、イスラエルの罪深い者たちの列に自らを加えています。神が彼に授けられた知恵は、この世の賢者たちの知恵に比べ、真昼に天に輝く太陽の光が最もかすかな星よりも明るいと同じほど、はるかに優れていました。それでも、このように天に大いに恵まれた人の口から出た祈りを思い巡らしてみなさい。深いへりくだりと涙と、心を引き裂く思いをもって、彼は自分自身のためにも民のためにも切に嘆願します。彼は自分の卑しさを告白し、主の偉大さと威厳を認めて、魂を神の御前にさらけ出します。

彼の嘆願には、何という切実さと熱烈さが表れていることか！彼はますます神に近づいている。信仰の手を高く差し伸べ、いと高き方の不変の御約束をつかみ取ろうとしている。彼の魂は苦悶のうちに格闘している。そして彼は、自分の祈りが聞き届けられたという確証を得ている。勝利は自分のものだと感じているのだ。もし私たちが民として、ダニエルが祈ったように祈り、彼が格闘したように格闘し、神の御前に魂を低くするなら、私たちもダニエルに与えられたのと同じように、私たちの嘆願に対するはっきりとした御答えを経験するはずである。天の法廷で彼がどのように自らの訴えを押し進めるか、聞きなさい：

わが神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開き、私たちの荒廃と、あなたの名によって呼ばれている都をご覧ください。私たちは自分の義のゆえにではなく、あなたの大きい憐れみのゆえに、嘆願をあなたの前に差し出すのです。主よ、聞いてください。主よ、赦してください。主よ、耳を傾け、なしてください。遅らせないでください。わが神よ、あなたご自身のために、あなたの都とあなたの民は、あなたの名によって呼ばれているからです。私がなお語り祈り、私の罪と私の民の罪を告白しているうちに、... 初めの幻で見たあの人ガブリエルが、急いで飛来して、夕のささげ物のところに私に触れた。

ダニエルが祈りをささげていると、天の宮廷から天使ガブリエルが舞い降りてきて、彼の願いが聞き届けられ、答えられたことを告げた。この力ある天使は、彼に知恵と悟りを授け、彼の前に来たるべき時代の奥義を開示するという使命を帯びていた。こうして、真理を知り理解しようと切に求めている間に、ダニエルは天から遣わされた使者との交わりへと導かれた。

神の人は、喜ばしい感情の高ぶりのためではなく、神の御心の知識を求めて祈っていた。しかも彼はこの知識を、自分のためだけでなく、民のために求めていた。彼の大きな重荷はイスラエルのことであった。彼らは、厳密な意味で言えば、神の律法を守っていなかった。彼は、彼らのあらゆる不幸が、その聖なる律法に背いた結果として彼らに降りかかったのだと認めている。彼はこう言う。「私たちは罪を犯し、悪を行いました……私たちの罪と私たちの先祖の不義のゆえに、エルサレムもあなたの民も、私たちの周囲のすべての者のそしりとなりました。」彼らは神に選ばれた民としての特別な聖なる特質を失っていた。「それゆえ今、私たちの神よ、あなたのしもべの祈りとその嘆願をお聞きください。そして、荒れ果てたあなたの聖所の上に御顔を輝かせてください。」ダニエルの心は、切なる思いをもって神の荒れ果てた聖所に向けられている。彼は、その繁栄が回復されるのは、イスラエルが神の律法に対する背きを悔い改め、へりくだり、忠実で、従順になるときに限られることを知っている。

彼の祈りに対する答えとして、ダニエルには、彼自身とその民が最も必要としていた光と真理に加え、将来に起こる偉大な出来事の見通し—それは世の贖い主の到来にまで及ぶ—が与えられた。聖書の真理をさらに明確に理解するために聖書を調べようともせず、祈りのうちに神と格闘することもしないで、自分は聖化されていると主張する者は、真の聖化が何であるかを知らない。

心から神の言葉を信じるすべての人は、御心を知ることによって飢え渇く。神は真理の源である。神は暗くなった知性を照らし、ご自身が啓示された真理を把握し理解する力を人間の心に授ける。

ダニエルは神と語った。天は彼の前に開かれた。しかし彼に与えられた高い栄誉は、謙卑と熱心な探求の結果であった。彼は、現代の多くの人々が考えるように、正直で、イエスを愛してさえいれば、何を信じてもかまわないとは考えなかった。イエスへの真の愛は、何が真理であるかについて、最も綿密で熱心な探求へと人を導く。キリストは、弟子たちが真理によって聖別されるよう祈られた。真理を切に祈りつつ探し求めることを怠る者は、魂を滅ぼす誤りを受け入れるに任されてしまうであろう。

「ガブリエルの来訪の時、預言者ダニエルはそれ以上の教えを受けることができなかった。しかしそれから数年後、まだ十分に説明されていない事柄についてさらに知りたいと望み、彼は再び神からの光と知恵を求めることに心を定めた。『その日々、私ダニエルはまる三週間、喪に服していた。私は美味しいパンを食べず、肉もぶどう酒も口にせず、また全く身に油を塗ることもしなかった……。そのとき私は目を上げて見ると、見よ、亜麻布の衣をまとい、腰にウパズの精金の帯を締めたある人がいた。その体はまた緑柱石のようで、その顔は稲妻のような有様、その目は火のともしびのようで、その腕とその足は磨かれた青銅のような色、その言葉の声は群衆の声のようであった。』」

神の御子にほかならぬお方がダニエルの前に現れた。この記述は、パトモス島でキリストがヨハネに現れたときに彼が記したものと似ている。今や私たちの主は、別の天の使いを伴って、終わりの日に何が起こるかをダニエルに教えるために来ておられる。この知識はダニエルに与えられ、私たちのために靈感によって記録された。Review and Herald, 1881年2月8日。

「天の委任された使者」であるガブリエルがダニエルにもたらしていた解釈は、彼が第九章においてダニエルに与え始めていた解釈の完成であった。「上に線を、また上に線を」という方法論は、預言的図解を正しく解き分けるために、第九章と第十章の両章の解釈とそれに伴う状況とをともに整合させることを要請する。ウライ川とヒデケル川の幻が結び合わされるのは、この解釈においてである。

ダニエルは、エレミヤとモーセの書物から、神の民の救いが間近にあることを理解していた。このことにより、ダニエルは、神の民の最終的な救いが間近にあることを理解している。終わりの時代の神の民を象徴している。終わりの時代の彼らは、バビロンでの七十年の捕囚という奴隷状態に投じられたダニエルが示しているように、自分たちが霊的に散らされてきたことを認識するようになる。そして彼らは、自分たちもダニエルと同様に、レビ記二十六章の「七度」によって示されている救済策に合致する、離散という自らの状態への応答を示さなければならないことを理解するようになる。

レビ記26章に記されている救済策が求める、ダニエルに象徴されるへりくだりの経験が終わりの時に表されるとき、終わりの時の神の民は、ある特定の期間、嘆き悲しんできたことになる。その期間は、大天使ミカエルが降臨するときに終わる。

次回の記事でこの研究を続けます。

あなたがたは異邦人の中で滅び、敵の地はあなたがたを食い尽くすであろう。あなたがたのうちに残される者は、敵の地で自分の不義のゆえに衰え果て、また父祖の不義のゆえにも衰え果てるであろう。もし彼らが、自分の不義と父祖の不義、すなわち彼らがわたしに対して犯した背きと、わたしに逆らって歩んだことを告白し、また、わたしも彼らに逆らって歩み、彼らをその敵の地に連れ込んだことを認めるなら、そのとき、彼らの割礼を受けていない心がへりくだり、自分の不義の懲らしめを受け入れるなら、わたしはヤコブとの契約を思い起こし、イサクとの契約も、さらにアブラハムとの契約も思い起こし、そしてその地を思い起こす。さらにその地も、彼らから見捨てられて彼らのいない間に荒れ果て、その安息を楽しむであろう。彼らは自分の不義の懲らしめを受け入れる。彼らがわたしの裁きを侮り、その魂がわたしの掟を忌み

嫌ったからである。しかしそれでもなお、彼らが敵の地にあるときにも、わたしは彼らを捨てず、彼らを忌み嫌って完全に滅ぼし、彼らとの契約を破ることはしない。わたしは主、彼らの神である。むしろ、わたしは彼らのために、その先祖との契約を思い起こす。わたしが異邦人の目の前で彼らをエジプトの地から導き出し、彼らの神となるために結んだ契約である。わたしは主である。レビ記 26:38-45。